

化表現である oral tradition に関する浩瀚な著作を準備中だと述べており、その成果を期待したい。

James M. Blythe:
*Ideal Government and the Mixed Constitution
in the Middle Ages*

Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1992, pp. xvii+343

土 橋 茂 樹

本書は、著者 James M. Blythe が B. Tierney の指導の下に理想的統治と混合政体 (mixed constitution) をテーマにして書き上げた博士論文に基づいている。ホメロスから説き起こし、混合政体論の変遷を近代初期まで追い続ける著者の手腕と博識、さらには中世と近代の連続性を通説に抗して強調していく姿勢はまさに師匠ゆずりと言ってよい。しかし同時に、Q. Skinner や J. G. A. Pocock らによって提起された思想史における方法論論争の洗礼を受けた世代らしい周到さで、本題に入る前に両者への自らの位置づけを明らかにしておくことを忘れてはいない。まず Skinner に対しては、一方で思想家の意図を無視したテキスト主義を排し、他方でコンテクスト主義による決定論を回避すべく言語世界的コンテクストを思想史研究に取り込もうとする彼の論究姿勢に著者は概ね共感を示すが、従来の思想史研究の方法から敢えて逸脱する必要性までは認めていない。Pocock に対しては、後で見るような見解の相違のため、また彼の方法の没歴史的傾向のために著者の対応は概ね批判的である。

さて、一般に政治思想史において、混合政体論の古代ギリシア起源及び近代初期の英国におけるその重要性は周知のところである。しかし、混合政体論に関する古典期のアリストテレス (以下 Ar) 的およびポリュビオス (以下 Pol) 的伝統が、一旦中世の長い空白を経た後、16世紀初めの Pol のラテン語翻訳化に及んで、ようやくルネッサンス思想において再生した、という「誤解」がいまだに根強い。本書が目指すところは、詳細な中世混合政体理論の研究によって、まさにこうした誤解を解き、中世 Ar 主義の後世への影響力を正当に評価することにある。この目的はさらに大きく

二分される。すなわち第1には、13・14世紀の大部分の Ar 主義的政治思想家たちが、何らかの形の混合政体を最善の政体として受容したということを示すこと、第2には、中世混合政体論を中世後期、ルネッサンス、近代初期における混合政体論の隆盛へと関係づけることが本書の目的となる。以下では本書の大部分を占める第1目的を中心に、本書の構成に沿って通観していくことにする。

全体は4部から成る。第1部では、古代および中世初期の混合政体論を概観することによって、後世の混合政体論が準拠すべき思考枠が抽出される。もちろん中心は Ar と Pol である。とりわけ、Ar によって導入され、中世の混合政体思想に密接に関連するようになった二組の概念群、すなわち(1)六種の単純な統治形態(三種の善き統治形態〔君主制・貴族制・善き民主制〕とその顔落形態〔僧主制・寡頭制・民衆支配制])と(2)四種の支配(regal/political/despotic/economic rule)を、(1)forms(統治形態)と(2)modes(支配方式)に区分する著者独自の解釈は、本書を通じて最も重要なものである。この解釈によれば、統治形態は権力を所有する者の数量(一者、少数者、多数者)と関係し、支配方式は権力がいかに行使されるか、その方式に関係する。たとえば political rule と regal rule は共に自由市民の支配であるが、前者は市民が交互に支配し支配されるのに対して、後者は全権力をもった者が自らの意志によって支配する方式を指す。また、広い意味での混合政体は、二つ以上の統治形態による権力の共有ないしはそれらの結合と定義される。Ar に即して見るなら、彼にとっての最善の政体は理想的には絶対君主制ないし貴族制だが、その一方で各階層の徳を公正に統合し得る混合政体が事実上の最善政体とされ、その究極として全市民が単一の階層すなわち中間階層に融合した政体さえもが構想されていた、というのが著者の主張である。これに対し Pol は、生物学的な生滅と政体の盛衰を類比した政体循環論を唱え、そうした政体の自然な顔落を防ぐために、3種の善き統治形態における各権力当事者相互のチェック・アンド・バランスによって政体の永続化を図った。この意味で彼にとって混合政体は最善の政体とみなされた。

次いで第2部では、ムールベケのグイレルムスによる Ar『政治学』のラテン語訳によって13世紀ヨーロッパに蘇った混合政体論が、トマスおよび13世紀を中心に活躍した彼の後継者5人に各1章ずつを割り当てる形式で詳説される。ここでも議論の要となるのは、統治形態と支配方式の区別である。トマスは、Ar の用語法を自らの政治的状況(既成事実としての君主制)に適用するために、しかもグイレルムスの誤

訳にも助けられ(?)以下のような抽象化をなした。すなわちトマスは、regal rule を絶対的な支配を行う王の支配に、political rule を共同体全体によって確立された法に従って支配を行う王を擁する統治体の支配に、それぞれ類比できると解釈した。political rule を平等な全市民による交替支配的なものと解す Ar に対して、あくまで法による支配を強調したトマスにとって、political rule はそれ自体が混合政体を示唆し得るのである。したがって、トマスにとっての最善政体は、少数の賢者と全市民の政治力によって宥和された political monarchy、すなわち混合政体的君主制(≠絶対君主制)となる。こうした政体観は、各統治形態の独裁化をその各々の徳の有無にかかわらず制度的に抑止した上で均衡を図るという点では、Ar よりも結局彼が直接知ることのなかった Pol に近いといえる。

対して、トマスの『政治学註解』未完部分を書き継いだアルヴェルニアのベトルスは、確かに混合政体を最善とみなしたが、それは混合政体が権力均衡化のシステムだからではなく、あくまで人民が有徳である限り諸特性(王→統一、貴族→知恵、民衆→力)を公正に統合できるからである。この点でベトルスは Ar 的伝統に忠実であると同時に、トマスの regal/political の截然たる区別を曖昧化し、よって後のトマス解釈混乱の因となったとされる。ただし、民衆を奴隸的/非奴隸的と二分し、後者のみが混合政体参与に値するとみなすベトルスの立場は、民衆の集合的徳を軽視する点ではむしろトマスに近い。一方トマスの『統治論』未完部分を書き継いだルッカのプトレメウスは、トマスの regal/political 区分に忠実である点を含めて、通説に反しベトルス以上にトマス説に親近性をもつ。あるいは regal rule を実質的に despotic rule と同一視する点ではむしろトマス説の徹底化が図られているともいえる。また、有徳な者だけが統治に参加すべきだという点では、この時代の大半の思想家と同様に彼もベトルスに同意するが、同時にそれをトマスの権力均衡説と結んだところに彼の貢献がある。さらに第2部では、アエギディウス・ロマヌス、アドモントのエンゲルベルト、そして教会における混合政体の意義を初めて擁護したパリのジャンが混合政体論における貢献という観点から論じられる。

続いて第3部では、Ar 主義的政治思想が相対主義化・世俗化を深める14世紀にあって、明確な主権国家概念を提示したパドヴァのマルシリウスやサッソフェラートのバルトルス、さらにウィリアム・オッカムらに見られる(時に示唆的に伏在する)混合政体擁護の思想が考察され、最後にニコル・オレームによる Ar 主義的政治思想

の総合、混合政体の強力な擁護に関する注目すべき 1 章が置かれる。残る第 4 部は、15 世紀および近代初期を舞台にした本書の第 2 目的に向けられる。結論を一言で述べるなら、トマスやその他の中世 Ar 主義者を介するばかりでなく、ジャン・ジュルソンやピエール・ダイイらの公会議主義者、さらにジョン・フォーテスキューを介してもまた混合政体の中世的な観念はルネッサンスや近代初期の政治思想に基大な影響を及ぼした、となるだろう。

以上、駆け足の要約に終始したが、中世混合政体理論を政治思想史上に正当に位置づけ、Pol 的伝統を質量共に凌ぐ中世 Ar 主義の流れをテキストと社会的・歴史的コンテキストの両面から過不足なく描出し得た点は本書の一大貢献と言えよう。最後に、批評というよりむしろ評者自身への課題という形で数点コメントを付加したい。

①絶対君主制か混合政体かという最善政体の問いは、単に政体論的議論の範囲内での理想／現実の二項対立図式に留まるものなのか。たとえば Ar の場合、前者が哲学の生と結ぶ線によってもう一本の議論の筋が描かれるはずではなからうか。だからかどうか、本書におけるプラトン記述はまったく生彩を欠いている。②近年、C. Flüeler によって進められている 13・14 世紀のパリ大学学芸学部における『政治学』註解と政治学的 Ar 主義の研究および T. Renna らによるフランス君主制の研究を本書と突き合わせるにより、著者の political monarchy 解釈の妥当性が吟味されねばならない。③同じマルシリウスの中に、権力分立論の創始者を見る A. Gewirth, その解釈を神話と断じ、イデオロギー史的観点から当時のイタリア・コムーネの政治的混乱の中に立ち現れた政論家を見る Skinner, Ar『政治学』のキェロ主義的受容者の姿を見る C. J. Nederman, こういった諸解釈に対して本書の混合政体論者マルシリウスは果たして生き残れるのか。④Pocock の civic humanism はスコラ思想とルネッサンス人文主義との分断を主張し、そこに連続的影響関係を見落としているという著者の批判は、本書の影響史的考察から首肯しうるが、事実上中世思想に負っているルネッサンス人文主義者がそれを Ar と Pol のものであるかの如く装う、まさにその「意図」の解明としては、本書は些か典型的であり、むしろ civic humanism 論による補完が必要ではないか。

なお、我田引水ながら、『中世の社会思想』（創文社、1996 年）（拙稿「13・14 世紀における Ar『政治学』の受容」を含む）が本書理解の助けとなるであろう。